

桐生市へのアクセス

桐生市へのアクセス

桐生市へのアクセス

【車でアクセス】

●東北自動車道

「佐野・藤岡IC」より約1時間

●関越・北関東自動車道

「太田桐生IC」より約20分

「太田藪塚IC」より約20分

【鉄道でのアクセス】

●東武鉄道

【浅草より新桐生まで】

特急りょうもう号で約1時間40分

※新桐生駅から桐生市街(本町方面)へは

おりひめバスで約20分(新桐生→有熾館前)

●JR両毛線

【高崎より桐生まで】 約45分

【小山より桐生まで】 約55分

【主な交通機関の連絡先】

●桐生駅(JR線・わたらせ渓谷鐵道)

0277-22-2312

●新桐生駅(東武線)

0277-54-1715

●西桐生駅(上毛電鉄)

0277-22-3201

●沼田屋タクシー

0277-44-5242

●桐生朝日タクシー

0277-54-2420

●桐生合同タクシー

0277-46-3939

企画・発行／『崋山と歩く会』(代表 岡田幸夫)

製作／マップデザイン研究室

協力／桐生芳工場

定価 180円(税込)

崋山と歩く桐生のまち

崋山と桐生のまち

三河藩江戸詰藩士である渡辺崋山と桐生を結びつけたものは、いったい何だったのだろうか？結論的に言えば、それは桐生織物である。

桐生の買継商・三代目岩本茂兵衛は江戸の大名屋敷を回って桐生織物の販売を行っていた。そのなかで田原藩邸に住む父・渡辺定通の知遇を得て、崋山の妹・茂登と結ばれた。茂兵衛は誠実で働き者だったので信用を得たのだろう。

江戸の武家屋敷に育ち、桐生の商家に嫁いだ茂登。環境の大きな違いに最初は戸惑ったことだろう。しかも男勝りで気の強い姑・お幸がいる。息子の喜太郎が12歳だったから、崋山が訪れる13,4年ほど前のことである。茂登は姑にもよく仕え、働き者と評判の嫁だった。岩本の親戚や桐生の人たちとの良好な人間関係をつくりあげていた。そのため岩本の店は繁盛していた。

崋山が多くの桐生の人たちと交遊できたのも、茂登の存在を抜きに語ることはできない。毛武遊記では茂登のことはあまり触れられていない。が、思わぬ人から妹の貞淑なことを褒めら

れると、うれしくなって酒を飲み過ぎてしまうなど、崋山の妹思いのほどは行間の随所ににじみ出ている。あるいは早朝に外出する崋山のために、お弁当や酒など前の晩から準備する様子がさりげなく触れられている。崋山の心を思いやりながら毛武遊記を読み進めれば、さらに味わい深いものとなるだろう。

雷電山(水道山公園)より桐生全景図



「水車そこはかとなくかけわたし、緑糸の糸をはぶく。山上古木によりてながむるに、たゞ人煙と山氣と凝りて半天に暮を掛けたることし。いともの静かなる中に水車と機声とうちまじりわがこゝろ基たのむ」

小倉峠(山)よりの眺望図



「また行くいよいよ高し。山腰をきり径を通ず、山の名小倉、この山上に詩人淡香亭を建て十山亭と名く。其勝概郷中第一の所なれば也。十山と名するゆへは、赤城三國妙義様名浅間日光碓井破風三峰富士等一望に尽くればよくべる也」

赤岩の渡し(富士山山頂より望む)



「冬のほどは橋かけて人馬を渡す。この川石多く水は枯れたれどもよどむかたいと深し。清きことは遊漁もかぞふるばかり、石にせかるゝかたはしら浪打あがりて雪をはき、声雷を遠く聞けるに似たり。北の方は赤石山河原にうち出て水ときそふありさま又よし。うしろは吾妻山延々仰俯し筆にも言葉にもつづしがたし」



桐生への道

天保2年10月11日、崋山は江戸城半蔵門近くにある藩邸を出発し、弟子の梧庵と共に桐生への旅に出ます。午前中は毛武地方の会員の紹介状をもらうために、青山の俳句の宗匠太白堂を訪ねたので、実際の出発は午後からでした。行路は江戸の板橋から熊谷まで中山道を進み、熊谷から妻沼へ太田を経て桐生へ至っています。2日間では約100キロの距離を歩きました。

崋山は武士ですから刀を帯びて、しかもわらじばき、荒川・利根川・渡良瀬川の大河も渡る旅で、初日は雨にたたられ、2日目は赤城おろしの冷たい風が吹きつける中を歩ききっています。我々現代人からみるとまさに超人的な体力といえるでしょう。

自分の足で歩くことでさまざまな名所旧跡を見聞し、また予期しないドラマが始まります。崋山の旅もそんな旅でした。

当時の桐生は絹織物が盛んでたいへん栄えていました。そんな桐生へ入るには「駕籠に乗って入るようであれば相手にされませんよ」と言われ、仕方なく高いお金を出して駕籠を頼んでいます。

桐生の歴史一コマ

天正から慶長時代にかけて絹織物産地として計画的に新町がつくられた。京都西陣から先進技術を取り入れ、崋山の訪れた天保年代には各種の高級織物を織り出し、西陣に肩を並べる産地となった。

美和神社より望む



「このやしろにつきて行けば大きき山も小さき山もたがいにくらび違ふさまにて、けしきいとよし」

桐生天満宮



「境内松並いと黒うしげり、中に一水きよらかに流れ出づ、此ながれにわたり廊あり、やしろはいとめでたくつくりなして、上も下も力をあわせ花鳥の形を彫りてなかなか都にもまれに見るおやしなり」

旧田村家住宅



今に羽前松山藩陣屋の陣屋門が残る

桐生紗綾市(大出東草画)



「紗綾市は日出に始まり日没に終る。高台があり売手は並び止まる人々に絹を持ち争ってこれる。その勢いは湯が沸騰しているかの如し」

桐生の産物(華山のメモ帖から)

「葉わさび、鮎、赤腹ハヤ、下仁田ネギ、鰻、ツグミ」

渡良瀬川の大鮎



大きさ 1尺4.5寸(42~45cm)
重さ 115匁(429g)

ボクリツカケ(黒皮茸)



桐生では山あわびと言う。

「家康僧正対座図」



栄昌寺の絵図を華山は模写

観音院(日限地蔵尊)



岩本家の菩提寺。喜太郎(後の岩本一徳)が両親の供養のために描いた涅槃図が奉納されている。

華山と桐生の人々

華山は桐生滞在中に多くのひとたちと交流している。武士、文人、職人、農民、女性など立場や身分にこだわらず、誰とでも愉快地談笑している。図に興が乗ればしばしば徹夜で議論した。

●岩本茂兵衛(三代目)

桐生織物を販売する買継商。江戸で田原藩に出入りするうちに渡辺家の知遇を得て、華山のすぐ下の妹茂登と結ばれる。当時、茂登(47歳)、茂登(37歳)、喜太郎(12歳、後の岩本一徳)、姑お幸(75歳)の家族。お幸は気の強い男まさりの性格。茂登はこの気難しい姑によく仕えた。華山はこの家に逗留して活動した。



お幸

●奥山昌庵

桐生の医者。華山ともの心を通わせた一人。毎日のように会って酒を酌み交わした。多くの弱者、病人を寄食させ面倒を見ていた。奥さんはあきれて家を出ていった。華山は「一郷第一の侠医」と評している。



奥山昌庵

●佐羽蘭深

桐生の豪商佐羽家の子で、独立して買継商を営んでいる。昌庵と並んで華山と親しく交遊した。「話を好み、能事をも手廻す、性恬、胸に一物もなし」と華山は評している。気持ちのよい快活な男だったのだろう。

●津久井のふ・ぬい母子

田原藩で華山の同僚だった斎藤式右衛門の姉のふは桐生の町医者津久井松宅に嫁いでいた。同じ田原藩の出ということで茂登とは日頃からよく親しい行き来があった。



ぬい

